西島章次；堀坂浩太郎；ピーター・スミス編著『アジアとラテンアメリカ――新たなパートナーシップの構築――』彩流社　2002年　256ページ

太平洋という自然の障壁を間において、歴史的にアジアとラテンアメリカの関係は疎遠であった。しかしグローバリゼーションという時代のうねりのなかで，両地域の関係も変化のきざしを見せつつある。その象徴ともいえるのが，1998年にシンガポールのゴーチェク・トン首相の呼びかけで始まった「東アジア・ラテンアメリカ協力フォーラム」の結成であった。本書は，編者の一人を代表とする東アジア・ラテンアメリカ関係に関する4年間にわたる国際共同研究の成果の一部である。両地域の関係の現状と展望を，主に外交，経済に焦点をあてて分析している。

本書は2部から構成される。第1部のテーマは外交関係である。アジア・ラテンアメリカ関係に大きな影響力を有する米国，日本，中国の外交政策の推移と展望が論じられる。第2部では経済関係が分析される。地域経済統合，企業の動向，日本からラテンアメリカへの資金の流れ，経済危機後のタイと韓国の改革の動き，両地域の経済危機管理の課題など，多様なテーマがとり上げられている。終章では本書の総括として，望ましいアジア・ラテンアメリカ関係の姿が論じられる。

両地域の関係について研究がきわめて乏しい現状において，本書は，第一線の研究者たちによる手堅い研究として高く評価できる。　（星野妙子）

山本純一著『インターネットを武器にした〈ゲリラ〉――反グローバリズムとしてのサパティスタ運動――』慶應義塾大学出版会　2002年　376ページ

1994年1月1日，メキシコ南部チアパス州の辺境で，サパティスタ国民解放軍(EZLN)が先住民の権利復活を掲げて武装蜂起した。以来，すでに10年近くの歳月が経とうとしているが，政府とEZLNの間の和平交渉は遅々として進んでいない。

本書はこのEZLNの運動の分析書である。本書からは運動に共感を抱く著者の熱い思いが伝わってくる。

本書の二本柱は，インターネットと言説分析であろう。EZLNの運動の特徴は，マスメディアとインターネットという，グローバル化時代を象徴する道具立てを巧みに用い，自らの主張を広く世界に訴えかけ，共感を呼び起こしている点にある。題名から伺えるように，本書も運動のこの側面に多くの叙述を割いている。一方，言説分析という独自の手法を用いて，EZLNから発表された宣言を分析し，彼らの主張の変化を辿っている点も，本書のもうひとつの特徴といえよう。

運動指導者マルコス副司令官の演説・対話やEZLNの宣言書の邦訳，関連年表，文献リスト，ウェッブサイトなど，収められた情報は多岐にわたり，EZLN運動を日本において広く知らしめるという本書のねらいに則した内容となっている。

（星野妙子）

堀坂幸太郎・細野昭雄・古田島秀輔著『ラテンアメリカ多国籍企業論――変革と脱民族化の試練――』日本評論社　2002年　296ページ

ラテンアメリカにおける近年の多国籍企業の展開には目を見張るものがある。投資国の多様化，そして投資分野のダイナミックな変化は，日本においても広く紹介される必要があると考えるが，本書はその状況を包括的かつ詳細に論じている。

著者等のグループはこれまでラテンアメリカの企業の国際化と民営化に関する優れた研究書を刊行しているが，本書はその第３冊目となるものである。多国籍企業研究には多くのアプローチがあるが，ここで採用しているのは，国際機関でも標準となっている「折衷モデル」の流れを汲むものである。これにより，直接投資の流れを投資国，産業，受け入れ国の三つの視点から，統一的に分析するフレームワークを設定することを試みている。読者は，本書を通じて多国籍企業が，従来とは違った形態でラテンアメリカ経済のメインプレーヤーとなっていることを理解することができる。

日本人向けの解説書としては，日本企業が分析対象となっていない点が残念である。ただし，注意深く読むことで読者自ら日本企業へのインプリケーションを導けるよう配慮がなされている。(北野浩一)

細野昭雄著『米州におけるリジョナリズムとFTA』神戸大学経済経営研究所　研究叢書59　2002年　233ページ

日本においても，ようやくメキシコ，そしてチリとの自由貿易協定（FTA）締結にむけた動きはみられるものの，残念ながら米州における地域統合やFTAの拡大の動きについては十分に知られているとは言い難い。国内の議論においては，特定の経済セクターへの悪影響への懸念が強いが，そのメリット・デメリットを冷徹に判断し，国際社会において貿易自由化の主流が多国間交渉から互恵主義的なものへと変化してきていることを認識する必要がある。

本書は⑴米州でどのようなRTA，FTAの進展がみられ，その中で何故メキシコとチリがFTA先発国となったのか，そして，わが国にとって何故両国はFTAの締結相手国として重要なのか，⑵どのような内容のFTAを結ぶことが望ましいか，という二つの課題について，豊富な資料に基づき詳細な検討をおこなっている。

特に，今後FTAがより進展していくにつれて重要になると考えられる，WTOとFTAの補完性，FTA間の整合性などがメキシコやNAFTAを例に詳しい分析がなされている。これまでWTO重視でやってきた日本の政策転換を考える上でも重要性を有するテーマの先行事例研究となっている。　(北野浩一)

西島章次・細野昭雄編『ラテンアメリカにおける政策改革の研究』神戸大学経済経営研究所　2003年　426ページ

ラテンアメリカの経済政策に関する近年の議論は，「市場か政府か」という２元的議論から「第２世代の改革」の中身の検討と制度の構築に集約されてきた感がある。本書は，前半の諸章においてそのような潮流を包括的に論じ，後半ではアルゼンチンとチリの事例を分析する，という構成になっている。

第１章から第９章までは，日本を代表するラテンアメリカ経済専門家により，筆者自身や海外の研究

蓄積を用いて理論的な分析が行なわれている。それぞれの論者でアプローチは異なるが，ラテンアメリカ全域，あるいはアルゼンチン経済政策における政府・制度と市場との関係に問題意識が絞りこまれている。

第10章以下は，ECLAC，チリ大学，カトリカ大学というチリを代表する研究機関に所属し，内外で活躍する研究者等により，チリ経済の1970年代以降の経済政策について論じられている。長期経済成長、貿易，民営化，金融・年金と広範な側面から経済政策を詳細に分析している。主張の異なる多様な論客により構成されているため各章の統一はないが，それがチリの政策論議の縮図となっていて興味深い。終章は，チリが２国間自由貿易協定（FTA）を推進する要因について，経済的政治的側面から考察している。現在交渉中である日智FTAのチリ側の誘因を知る上で参考になる。　（北野浩一）

吉田太郎著『200万都市が有機野菜で自給できるわけ――都市農業大国キューバ・リポート――』東京築地書館　2002年　405ページ

本書は，ソ連崩壊後のキューバで出現した都市型有機農業を中心に，経済危機に対応するキューバの姿勢を，先進国の市民運動家やエコロジストも学ぶところ多し，という視点から書かれた本である。

ソ連からの援助が途絶えたあとの物資不足を補うために，足りない化学肥料や農薬の供給を補うための有機農業，医薬品が不足しているための伝統的な薬草や鍼灸治療の導入，緑化運動の進行，麻痺した公共交通機関の代替として出現した自転車利用の評価，輸入に依存する石油が不足しているため，火力発電ができなくなったので太陽発電を進めているがこれが意外に進んでいること，コミュニティ活動の推進，などが具体的な内容である。

インターネットなどを駆使して広く資料をあたり，また現地調査を数多く実施して，偏りはあるものの多方面の人材にインタビューしている姿勢は評価できる。経済指標その他の数値も多く掲載されていて，資料としても有用なものと思う。著者がキューバ研究を専門にしているわけではないことを勘案すれば，相当な努力をされたものと敬意を表したい。

しかし，キューバの現在の動きは，基本的には革命後最悪の経済危機に対応し，生存するためのものであり，衣食足りた先進国で試みられているものとは質的に異なるものである。キューバ人は，太平洋戦争中の日本人と同じく，サバイバルのためにこそアパートで鶏を飼い，バスタブで豚を育て，車に混じって命がけで慣れない自転車に乗るのだ。

キューバ経済は確かに1990年代前半に比べれば好転しているが，それでも大多数の国民は今でも，ソ連崩壊前とは比べものにならないほど苦しい生活を強いられている。貧富の格差が拡大しているので，経済開放政策の波にうまく乗ったつつましい「富裕層」は良い生活を手に入れているが，そういう人は少数派である。経済危機は今も継続しているのだ。経済が好転すれば，サバイバルのために取り入れられたさまざまな目新しい動きはたいてい姿を消す。

政治的・経済的な自由が制限されているキューバでは，現体制や経済制度を変えることは個人の力では不可能であり，それらの制限の中で個人に残された生存のための数少ない選択肢が，有機農業であり，自転車であると筆者は考えている。

ともあれ，日本では入手できる資料が少ないキューバについて，精力的に調査・分析された労作であることを評価したい。　（山岡加奈子）

加藤　薫著『キューバ――現代美術の流れ――』東京プロモ・アルテ，ラテンアメリカンアートギャラリー，およびギャラリー GAN　2002年332＋xiページ

本書は，先コロンブス時代から現代に至るキューバ美術を総合的にまとめたものであり，また各時代の美術作品や様式を説明する際に不可欠な時代背景にもよく言及している。美術に関心のある読者はもちろん，キューバ一般に関心がある向きにとっても，それぞれの時代を背負った芸術家の作品を通してキューバを有機的に理解する助けになると思われる。

構成は時系列に主要な作品や作家を解説する形を採っており，先コロンブス時代，植民地期，独立戦争前後，共和国時代，キューバ革命後に章立てしている。そして最後に世界からみたキューバ美術の再評価の動きについて，キューバ内外の動きを盛り込みながら論じている。資料としてはキューバ革命後の時期がもっとも充実しているが，キューバ国内で活動した画家だけでなく，亡命組にも紙幅を割いている点に見られるように，政治的イデオロギーの問題はひとまず横に置いて，美術そのものの評価に重点を置いている。

本書は，キューバ美術史としては世界でも初めての，先コロンブス時代から現代まですべてカバーした通史である。その点だけとっても著者の苦労がしのばれるが，このように専門的な分野の書物を日本で出版するためになされた努力を思うと，率直に敬意を表せざるを得ない。キューバに関心を寄せる人々に広く読まれることを期待したい。　（山岡加奈子）

青木　公著『ブラジル大豆攻防史――国際協力20年の結実――』国際協力出版会　2002年　219ページ

本書は，国際協力や途上国援助に関する著書で有名なジャーナリスト，青木公氏が，JICAの大規模プロジェクトであるブラジルの日伯セラード農業開発協力事業について執筆した書である。同事業は30年近くにわたり実施され，2001年にその幕を閉じた日本の対ブラジルODAの象徴的プログラムであり，青木氏は1995年にも同事業に関する著書『甦る大地セラード』を出版している。

本書は全部で10の章から構成され，日本の途上国援助のあり様と問題点，ブラジルの開発の歴史と同国の特殊事情，日系農家とヨーロッパ系農家の営農の違い，プロジェクトによって開発され変化していく現地の様子などが，ブラジルでの豊富な取材をもとにまとめられている。そして，本書の最後において青木氏は，日伯セラード農業開発協力事業はさまざまな問題を抱えながらも，「国際的な分業システム構築に貢献」した共同事業であったと結論づけている。

青木氏がブラジルの専門家ではないことから，同国に関して事実とは異なる説明が若干見られる。しかし，本書はわが国の対ブラジル援助の中で歴史に残るプロジェクトの全容を紹介することを通じて，われわれに途上国に対する援助と開発のあり方についての考えを深める機会を与えてくれる。

（近田亮平）